
成人保健看護

報告者：謝花小百合

教育及び実践の課題

本学は、2011年よりカリキュラムを抜本的に変更し、少人数教育など、これまで以上に学生の主体性を尊重した教育方法の改善に取り組んでいる。平成26年度から新カリキュラムでのクリティカル・緩和ケアの演習・実習が開始となった。これまでの緩和ケアの授業に加え、緩和ケアの演習で下記の点を追加し教授することが望ましいと考えた。

1. 成人保健看護において、死にゆく患者のケアに関しては、視覚的に訴える教材(絵本)を使用し、学生自身がどう感じるか、また学生同士で死についてのグループディスカッションを行い、学生間で主体的に学びが深められるような教育を行っていた。しかし、学んだ知識を臨地実習において具体的に活用できるような取り組みが必要であると考えた。
2. 演習・実習で死について学生が感情を表出できる機会を設ける必要があると考えた。
3. オムニバスで行うクリティカル・緩和ケア演習において、担当教員間の終末期ケアに関する知識およびシミュレーション教育に関する共通理解が必要であると考えた。

活用した論文の概要

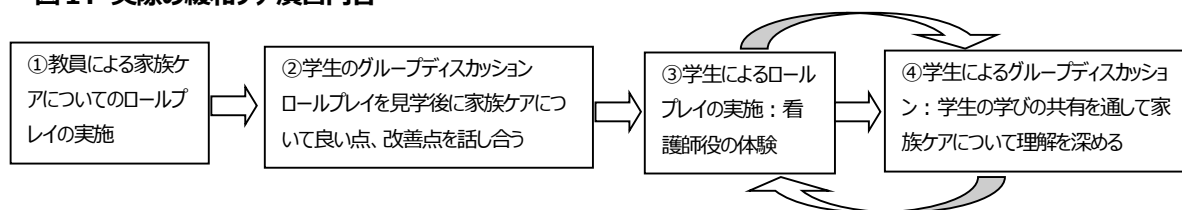
R. Twigg ら (2012) は、看護大学4年次の学生を対象に、終末期における患者および家族への関わりについてのシミュレーションを実施した結果、学生は従来の教授法では、終末期での看護の役割を理解できなかったが、シミュレーションの体験を通して、終末期ケアにおいて看護の重要性を理解できたと述べている。さらに、デブリーフィングを通してシミュレーションでの経験を話し合うことで、終末期ケアの内容を理解することに役立ち、ほとんどの学生は、デブリーフィングやシミュレーションの経験を通して、授業内容の理解や看護実践に大きなインパクトを感じていたと報告している。

教育及び実践への活用

実際の教育への取り組みとして、緩和ケア病棟の実習で遭遇するであろうと思われる臨終後の家族ケアに関する事例のシナリオを作成し、2コマの緩和ケア演習に取り入れた。

具体的には、実際の臨床現場・臨床場面を模擬的に再現した学習環境を設定し、学習者(学生)の模擬体験(シミュレーション体験)から看護者としての実践力(知識・技術・態度)の向上を目指した取り組みを行った(図1)。

図1. 実際の緩和ケア演習内容



今後は、演習・実習において学生が死について自己の感情を表出できる場の設定を行うことや、実際に受け持ち患者との死別を経験した学生に対して、個別の振り返りや実習期間中・後を含めた継続的な支援体制を検討することが必要である。

参考文献：R. Twigg ら.(2012).Teaching End-of-Life Care Via a Hybrid Simulation Approach, Journal of Hospice & Palliative Nursing 14(5), 374-379.
